

4554 富士製薬工業

今井 博文 (イマイ ヒロフミ)

富士製薬工業株式会社代表取締役社長

タイの企業の子会社化で海外展開を加速

◆2012年9月期決算サマリ

2012年9月期の売上高は215億2000万円(前期比0.5%減)であった。売上総利益は、薬価改定に伴う販売価格の低下および新工場棟の固定費増加により93億1800万円(同9.5%減)となっている。販売管理費は、研究開発費が前期と比べ2億1200万円減少したこと等により65億7100万円(同2.4%減)である。営業利益は27億4600万円(同23.0%減)、経常利益は26億9800万円(同23.9%減)で、当期純利益は、特別損失として退職給付債務の増加額3億6400万円を計上したことなどにより13億7000万円(同37.8%減)であった。前期末において診断用薬を中心に流通在庫が過剰であったため、上半期は売上高が前年同期比で大幅に減少した。その後は在庫調整が一巡し、下半期は市場の需要に応じた順調な回復となった。

薬効別の売上高として、診断用薬では、オイパロミンが62億3300万円(前期比6億4300万円減)、イオパークが16億4800万円(同9100万円増)であった。これらにより、診断用薬合計は84億1900万円(同5億5800万円減)となっている。ホルモン剤では、ルナベル配合錠の25億1100万円(同2億4000万円増)の寄与により、ホルモン剤合計は71億8900万円(同4億8400万円増)となった。循環器官用薬は、主にアリプロスト注の売上減少により9億6200万円(同1億5000万円減)となっている。このほか、体外診断医薬品が8億5600万円(同4600万円増)、抗生物質・化学療法剤が7億2600万円(同2600万円減)、泌尿・生殖器官系用薬が3億9600万円(同2200万円減)、外皮用薬が2億8500万円(同2900万円減)、その他が26億8400万円(同1億7000万円増)であった。

急性期医療に関し、当期はDPC対象病院数が1,505施設、このうち当社の納入実績は1,333施設で、カバー率は88.6%となった。今後もDPC対象病院のカバー率を更に向上させるとともに、一施設当たりの売上高を高めていく。女性医療に関しては、ジェネリック薬と新薬のシナジーモデルを構築することを基本戦略とし、今後3年で新製品12品目の上市を予定している。売上高は69億円で、中期経営計画では2015年9月期に95億4000万円を見込んでいる。

今年発売した新製品として、ル・エストロジェルがある。腕に塗付することで体内に女性ホルモンを補い更年期障害を改善する医療用医薬品であり、(株)資生堂が開発した。女性ホルモンのエストラジオールの外用ゲル剤として、日本で初めて承認された。薬価基準収載日の5月31日より当社が販売をスタートし、当期は4ヶ月間のみの実績であったが、来期以降は売上に寄与するものと見込んでいる。

貸借対照表では、総資産が314億7100万円(前期末比17億1300万円増)となった。純資産は220億9800万円(同8億3300万円増)で、自己資本比率は70.2%である。資産の部では、期末日が金融機関休業日であった影響で売上債権が増加しているほか、新工場棟の本稼働によりたな卸資産が増加した。負債の部では、仕入債務や退職給付引当金が増加した。

キャッシュフロー計算書では、現金および現金同等物の期末残高が56億7600万円(前期末比4億1500万円増)となった。営業活動によるキャッシュフローは、利益の減少に加え売上債権やたな卸資産の増加により11億

71 百万円の収入(前期は 19 億 54 百万円の収入)である。投資活動によるキャッシュフローは、主にセール・アンド・リースバック取引の収入により 80 百万円の収入(同 22 億 88 百万円の支出)となった。財務活動によるキャッシュフローは 8 億 35 百万円の支出(同 24 億 97 百万円の収入)である。以上により、フリーキャッシュフローは 12 億 51 百万円(同 15 億 85 百万円増)の収入となった。

◆2013 年 9 月期業績予想

2013 年 9 月期の業績予想に関し、10 月にタイ最大の医薬品製造受託企業である OLIC 社を買収したことに伴い、2013 年 9 月期より連結決算に移行する。単体では既存品で前期比 17 億 55 百万円の増加、新製品で同 14 億 60 百万円の増加を見込んでおり、売上高は 247 億 35 百万円(前期比 14.9%増)とする。売上原価率は前期から 1.4 ポイント改善する一方、販売管理費は前期に比べ 8 億 84 百万円増加する見通しである。営業利益率は前期の 12.8%から 14.6%に改善させ、営業利益は 36 億円(同 31.1%増)とする。経常利益は 35 億 71 百万円(同 32.3%増)、当期純利益は 22 億 37 百万円(同 63.2%増)の計画である。連結では、子会社の 2013 年 1~6 月の業績のみを連結対象とする見込みである。したがって、半期分の売上高 7 億 65 百万円を加算し、連結売上高は 255 億円となる。営業利益の半期分は約 1 億円、のれんの償却費の半期分は 1 億 26 百万円の見込みである。連結の営業利益は 35 億 75 百万円、経常利益は 35 億 40 百万円、当期純利益は 21 億 90 百万円となる見通しである。

◆明確なビジョンのもと課題に取り組む

当社は 2015 年に設立 50 周年を迎える。重点課題として、2015 年までに当社の強みである既存コア事業の拡大と、次の半世紀につなぐ新しい事業機会の具体化を実現することに取り組んでいる。中期ビジョンとしては 4 点ある。まず、新たな注射剤を軸とした急性期医療事業の拡大である。主力のがん診断用薬から、バイオ後続品 G-CSF を布石とし、がんの治療へと対象領域を拡大する。付加価値の高いバイオ、DDS の技術、D&D(ドラッグとデバイスの組み合わせ)等をジェネリックに加え、開発プランの充実を図っている。次に、女性医療のリーディングカンパニーの実現である。現在、産婦人科領域で診療の柱であるホルモン療法 of 全てをサポートする体制の整備を進めている。ブランド薬の承継を進めると同時に、ジェネリック薬とブランド薬のシナジーモデルを構築する。そして、研究開発を真ん中にした事業運営体制の構築を図る。このため、2013 年 3 月に富山市内に新たな研究開発センターの立ち上げを予定している。最後に、海外での事業展開につき、この中期でメドをつけたい。タイの企業の子会社化に伴い、東南アジア市場での事業展開を具体化することが課題である。

◆生産体制の整備を着実に実施

中期ビジョンに向けた取り組みとして、まず既存コア事業の拡大に関しては、新工場棟を立ち上げ、主力造影剤の生産能力の倍増を図っている。女性医療向けには、大手製薬数社とブランド薬の承継販売を協議しており、1 社と 4 品目程度についてはほぼ決定した。2013 年 9 月期は、ルナベルの後継品で超低用量の月経困難症治療薬の上市計画がある。新規事業機会の具体化に関し、バイオ後続品 G-CSF 製剤については、今般製造販売承認を取得した。また、バイオ医薬品の高度な無菌性を保証する製造ラインがほぼ完成した。さらに、世界でおそらく初めてとなる、一般製剤と高活性の医薬品をマルチで製造できる新しい製造ラインが 2013 年 10 月に稼働予定である。オンコロジーについては、経験のある専門スタッフ 9 名を採用し、専任チームの組織化を図った。

中期経営計画では、足元の業績、市場環境の変化、海外子会社の株式取得等に伴い、従来開示していた計画の見直しを行った。2015 年 9 月期の業績は、売上高で 320 億円、営業利益および経常利益で 52 億円、当期純利益で 33 億円の達成を目指す。

株主還元については、2014 年 9 月期に連結配当性向を 30%に引き上げることをメドとし、1 株当たりの配当を高めていく。当社としては、今後とも経営理念を軸に当社らしさや独自性に拘り、企業価値の持続的な向上に努め

る。

◆ 質 疑 応 答 ◆

女性医療について、2015年9月期までに大幅な伸長を予想している要因は何か。

ブランド薬の承継が具体化し、これが寄与する2014年9月期から予想に上乗せした。また、ルナベル配合錠やジェネリックの避妊薬など、主だった製品の実績と傾向を踏まえ、今期から全般的に若干計画をプラスに修正した。

海外展開について、今回買収したOLIC社をどのように生かしていくのか。

まず、東南アジアと日本でジェネリックを対象に開発を進め、同じタイミングで認可を取得し、日本のみならず東南アジアにも流通させる。流通について、当面は実績のある東南アジアの会社と共有する。また、今後注射剤のジェネリックも競争が激化するため、富山の供給機能を段階的にタイに移管することを検討している。さらに、CMO（医薬品受託製造）事業では、これまで欧米の大手製薬が中心であったが、今後は日本の製薬企業からの受託拡大を進めたい。

CMO事業では、タイの子会社買収前に30億円程度の売上があったが、今回の中期経営計画では来期以降20億円まで増加させる計画となっている。なぜ減少したのか。

これまで開示していた売上金額は、タイの会計基準の数値を円換算していた。連結決算に組み入れるにあたり、今後は国際会計基準を基に算出した数値を連結する見込みである。今回の中期経営計画では、純加工賃のみを売上高として計上したため差額が発生しており、事業として何かが増減するわけではない。また、子会社の固定資産や減価償却費等については、現在国際会計基準に基づいて精査しているところである。

今期売上予想の薬効別・医療領域別売上高で、その他の項目が大きく増加するが、これは何か。

リマプロストアルファデクス錠のほか、新製品でその他に分類されるものが多数ある。細かい品目の合算である。

リュープリンのジェネリックについて、進捗状況を伺いたい。

現在大手新薬会社と共同で製剤開発の段階である。ただし、さまざまなハードルがあり、リュープリンとDDS製剤の新製品の見込みを、現在の中期経営計画からは1度はずした。

（平成24年11月22日・東京）

* 当日の説明会資料は以下のHPアドレスから見ることができます。

http://www.fujipharma.jp/ir/library/meeting_data.html